(一) 善知と狼

昔、畑銀山付近の山峡に善知という賤しい男と母が住んでいた。善知は野を拓き畑を耕し、畑の作物や四季おりおりの山菜、薪炭などをもつては市にでて商い、貧しいながらも幸福な日々を送つていた。

ある日善知はいつもの如く、畑のものなどをになつて母とともに市に出て商い、母の好きな食物や衣類などを求めて、母をいたわりつつ帰途についてとある林にさしかかつたら、突然木蔭より小牛程もあると思われる一匹の狼が現われ、白いキバをむき出し、老母をくわんとして襲つて来た。善知はいたく驚いたが勇気を出し、声をはりあげ、「母は年老いて肉うすし、我が尻の肉をくつて母の命だけは助け給え」と着物をぱつとぬぎ捨て裸となり尻を向けて狼の前へと進んでいつた。狼はその勢に恐れたのか、しつぽを巻いて逃げ去つた。

善知も母も危難の去つたことを喜び着物をつけようとするところに、一群の武士があたりをはらいながら進んできた。武士の通過するのを待つた。すると一群の武士の大将とおぼしき一人の武士が、善知の姿の異様なのに不審を抱いたのか、馬を止め、「そちは、なぜ裸なるのか」と尋ねられた。善知はおそるおそる進み出て、狼の難をのがれたことをかたつた。武士は重ねて路上をさして、その物はなにかと問う。善知は心乱れていたため気がつかなかつたが、先程の狼がくわえて来たものらしいと答えた。武士は家来に命じてそれを拾わせ中をあらためさせたら、泥まみれとはなつているが、錦の財布でありなかにはたくさんの銀銭が入つていた。武士は財布を善知に与え「孝行に狼がめぐんでくれたものと思う、今後もよく母をいたわり養え」といい、それに加えて当座の恩賞と、青銅五百文と布一巻を下されて、その場を去つた。かの一群の武士は、清原武衡征討のため国内巡見中の八幡太郎義家公であつたという。